

「永遠の虚無」と対峙し真実を詩作する人  
大井康暢第十一詩集『象さんのお耳』に寄せて

### 鈴木比佐雄

大井康暢さんの新詩集『象さんのお耳』の詩篇を読むと、時代を見詰める一人の存在者が、熟慮の果てに垣間見てしまう人間の内面の深淵を感じさせてくれる。またその一回性の思索の時間を詩に転化させる高度な表現者の激しい衝動さえ垣間見ることが出来る。詩人が求めてやまない直観力と思索力の融合に、絶えず挑戦している詩人だと思われた。大井さんは中原中也論や戦後詩論などの数多くの評論や詩論などを書き継いできた。並行して書かれた詩群は、物や事柄や歴史を直視し内面に問うている誠実な思索詩と言えるだろう。と同時に祈り、不安、怒りなどの複雑な感情を同時に包み込んだ人間の真実を追求した詩群でもある。大井さんの詩的活動は評論が高く評価されて

きたが、詩作品もまた大井さんが半世紀をかけて心血を注いできたものであり、もって詩作品の価値を論じられるべきものだとは考えていた。

大井さんは今まで十冊の詩集を刊行している。その『滅び行くもの』、『非在』、『堕ちた映像』、『詩人の死』、『ブリヂストン美術館』、『現代』、『沈黙』、『哲学的断片ノ秋』、『腐刻画』、『遠く呼ぶ声』の十冊においてもまた、その時代の困難な問題を大井さんは直視して、詩作を試みてきた。その誠実さは、各時代に曝された自らの実存を通して他者や人間社会の問題点を果敢に抉りだそうとしていた。既刊詩集十冊を論ずることは、戦後の歴史を考える上での良きテキストともなりうる詩篇群だと考えられる。近い将来、全詩集が刊行予定なのでその時に大井さんの戦後詩の試みの全貌が明らかになるだろう。

今回の第十一詩集『象さんのお耳』四十五篇は、四章に分けられている。一章「夕蟬」十五篇「んだらう」という問いを発する。大井さんの回答は、沙漠に埋もれた髑髏であるとか、冬の火花であるなどと展開していく。そして「垣間見た凍りつく火の形と永遠の空虚／何もない眼窩の奥に砂がこぼれる」によって、人類や生あるものの歴史時間の「永遠の空虚」こそが「もつとも美しい」のではないかと語っている。大井さんの「眼窩の奥」からの視線がこのような詩を創り上げたのだろう。

／八方に細い枝をさしのべる／いのちが満開だ」というように繊細でありながら大胆に生あるものの本質に迫っていくのだ。詩「訪れ」の詩行にある「体が眠るとき不安が眼をさますのだ」という表現なども、大井さんが人間の実存のあり方に耳を澄ましている思索的な詩人であることを示している。このようにどの詩篇も季節感の中に季節を超えた生あるものの宿命を直観し語ってしまうのだ。一章の最後の詩篇「冬の火花」では、「この世で、つまり地球上で／もつとも美しいものはな

第二章「難民の季節」九篇には、クラシック音楽や映画作品に触発された詩篇が収録されている。冒頭の「難民の季節——タケミツに——」は、「野分が裏の竹藪で騒がしい」で始まるのだが、その音を聴きながら大井さんは国境をさまよう難民や波間を漂うボートピープルを想起し、タケミツの前衛的な音楽を想起していく。そして「彼の尺八は丸ごと虚無を吹いていた」という。西洋の音楽に飽きてタケミツの音楽に熱狂したヨーロッパ

パ人たちは、虚無の新鮮さを聞いていたのではないかと自説を語っている。

三章「雪が降る」六篇は、全篇が亡くなった大森隆夫などの親しかった友人達や時代の犠牲者達の鎮魂詩篇だ。冒頭の詩「雪が降る」は詩人黒田三郎の夫人の光子さんの死を悼んだ詩だ。クラシック音楽好きだった光子さんと大井さんの会話から成り立っている。戦後詩の名作を書いた黒田三郎の詩に登場してくる光子さんの感受性の在りかを伝えている貴重な詩だ。

第四章「象さんのお耳」十五篇は、どれもが自由闊達でありながら人間の深淵を垣間見せてくれる詩篇群だ。またタイトル詩にもなった「象さんのお耳」は、3・11を予言していたかのような文明の危機を洞察していた詩でもある。この詩を引用してこの小論を終えたい。大井さんの人間存在や歴史時間の真実と対峙する重厚な詩の魅力を多くの人たちに知ってもらいたいと願っている。

#### 象さんのお耳

象さんの耳はなぜ大きい／それは遠いところから／神のお告げを待っているからだ／砂漠に沈む焼け焦げた真つ赤な太陽／高い空から光が降り注ぐ／砂と草原の陽炎のたつサバナ／野生の聖域を群れなして歩く／大きな耳  
それは／水の音を聞き分けるためにある／光にきらめき／ちよろちよろと滴り落ちる／熱帯樹林の幹を伝って／砂漠の水を集めて木陰の池に流れる／水のさわぎを聞くためにある／耳／百キロの遠くからでも聞き分ける／水の音を聞き／水の危険を知っているのだ／地震や津波を仲間知らせるために／おそろしい悲鳴をあげ／長い牙を振り立てて／遠く高い所へ狂ったように逃げる／耳を広げ翼となつて／それが象さんのお耳

大井康暢詩集『象さんのお耳』栞解説文  
鈴木比佐雄

コールサック社  
2011